

国際学会報告

小林 慎

函館五稜郭病院の名前を国際学会で宣伝できる機会を2年にわたり得ることができました。今回は、平成18年のプラハと、平成19年のアムステルダムでの学会発表について本誌面を借りてご報告させていただきます。学会で発表できるような仕事が行えるのも、病院職員皆様の応援があつての賜です。国内のみならず世界に恥じない診療を今後とも続ける上でも、どこでどのような発表がなされているのか、拙稿より今ひとつ確認いただければ幸いです。

3rd World Congress of International Federation of Head & Neck Oncologic Societies in Prague (第3回国際頭頸部がん学会)での発表を終えて

記：平成18年7月

世間はサッカーのワールドカップで盛り上がっていた平成18年6月末、チェコのプラハにて頭頸部癌治療に関する国際学会が開催されました。平成17年春に当院で成功した「遊離回盲部パッチを用いた音声再建法」を本学会で紹介するため、成田からチェコのプラハへ向かいました。ヨーロッパのハブ空港であるフランクフルト(ドイツ)で乗り継ぐ航空チケットは、世界中のサッカーファンの到来のため予約困難となり、やむなくチェコとドイツを飛び越え、パリのシャルルドゴール空港で折り返してプラハ入りしました。満員のエコノミークラスのなかで16時間を過ごし、やっと中世の古都プラハに到着です。本学会は、頭頸部がん治療における各国の取り組みを紹介する世界会議で、手術治療、化学療法、放射線治療、診断法など分野は多岐にわたります。発表形式は、各国の代表施設の口演が100題で、ぼくを含めポスターでの発表が260題、日本からは国立がんセンターなど4施設の発表がありました。自分のポスター掲示と質疑応答を終え、他施設の発表を聴講しました。国際学会では恒例の晩餐会も、8世紀に建

造されたプラハ城の大広間にて盛大に開催されました。プラハは、世界でいちばん美しい古都と言われ、世界遺産にも登録されているそうです。モルダウ川の両岸に立ち並ぶ古い街並みは、東西ヨーロッパ文化を受け継ぎ、昔のままの佇まいを見せていました。また、当地は、ピルスナー・ラガービールの発祥の地でもあり、ちょうど、サントリーの「ザ・プレミアムモルツ」がモンドセレクションの最高金賞を受賞し、その受賞式が市内のホテルで行われたばかりでした。その一面、スリヤぼったくりが多く、治安に多少不安があるとの海外渡航情報でしたが、実際は思いのほか観光客も多く(日本人はほとんど見かけず)治安も良く、地下鉄やタクシーも問題なく利用できました。プラハでは日本との時差が7時間あるため、夕方には睡魔に襲われ、朝の3時頃には目覚めてしまう日々を2日間過ごし、あわただしく帰国の途に就いた次第です。久しぶりの国際学会での発表でしたが、国内外の最新の医療情報に触れることは今後の診療においても有意義であり、また、外国の地において函館五稜郭病院を宣伝できる機会を得られたことを光栄に思います。「掲載論文：Kobayashi M, et al: Design of a new technique using a free ileocecal patch transplantation for a secondary voice restoration JPRAS (Journal of Plastic, Reconstructive & Anesthetic Surgery) 2007 Epub ahead of print」

The 8th International Netherlands Cancer Institute Head & Neck Symposium (第8回国際頭頸部がんシンポジウム)での発表を終えて

記：平成19年12月

冬の気配が近づく平成19年11月14日、オランダスキポール空港へ向けて日本を旅立ちました。今回の発表は、「オリジナルの新しい気管再建法」を国外で報告する最初の機会となります。この手技は、平成12年、弘前大学在職中に考案し本邦第一例目に成功した方法で、癌の合併切除により欠

損となった重要部位の気道を再建するために、別の場所から気管の一部を切り取ってきて移植するといったこれまでにない全く新しい方法です。平成19年春には、これまでに成功した6例をまとめて報告した英語論文に対し研究奨励賞を日本外科学会よりいただいております。本邦では評価された術式ですが、根治手術に対する基本概念が多少異なる海外の学会ではどのような評価を受けるか、興味と不安の混じった海外出張となりました。KLMオランダ航空で13時間のフライトの後、夕刻のアムステルダムに到着しました。時差は8時間。気温は日本の12月並みですが、雪はありません。16世紀に海運で栄えた街並みは扇状に広がった運河に沿って広がっており、古い煉瓦の建物が整然と並んでいます。市内の移動手段としては路面電車(トラム)が便利でした。シンポジウムは、オランダ国立がんセンターで2日間に渡って行われ、各国を代表する教授クラスの面々が約200名ほど集まって、各国の頭頸部がん治療について討論を交わしていました。1日目の最後にポスター発表(各国から10演題が採用)のツアーが企画され、座長が順番にオーディエンスを引き連れて回って討論する形式がとられました。わざわざ日本からの参加という気遣いもあってか、今回発表した新

しい気道再建法に対する評価もすこぶる良く、ホッとしました。オランダといえば、チューリップや風車ですが、寒いこの季節ではこれらを観光するツアーもなく、空いた時間はすべて美術館巡りに費やしました。オランダ美術の代表画家は、レンブラントやフェルメールで、国立博物館や市立博物館で見ることができました。また、ゴッホ国立美術館では、700点にもおよぶ作品を一日がかりで鑑賞しました。なお、この美術館の新館は故黒川紀章氏設計によるものでした。アムステルダムは治安もよく、市内の交通網も利用し易く、食べ物も日本人に合います。観光で行くなら5-6月のお花の季節をお勧めします。時間があれば近隣のベルギーやルクセンブルクに足を伸ばすのもいいかもしれません。

一昨年のプラハでの発表に続き今回も欧州で学会発表をさせていただきました。遙か遠くの日本の一民間病院での仕事が世界的に認められる日を夢見て、皆様の協力のもとでさらに良い仕事をしていきたいと思っています。「掲載論文：Kobayashi M, et al : A new surgical technique for a reconstruction of the cricoid cartilage and trachea using a free tracheal autologous graft. Surg Today 36 : 316-20 2006」

プラハ



発表ポスターの前にて証拠写真の撮影



市庁舎から見た街並み



旧市街広場にて



市内よるモルダウ川をはさんでプラハ城を望む



プラハ城の階段より

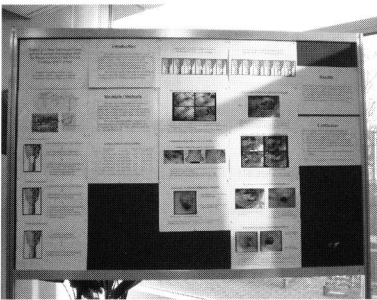
アムステルダム



KLMオランダ航空



オランダ国立がんセンター (学会会場)



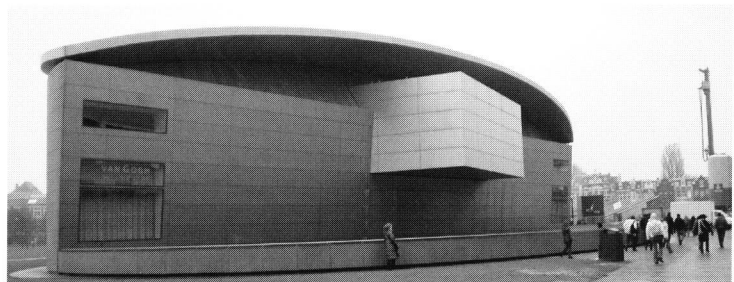
掲示ポスター



アムステルダム市内の風景



会議場で聴講中



黒川紀章氏設計による新ゴッホ美術館